

原 著

聴覚障害児における比喩文理解

吉岡 豊 種村 純

川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科

(平成10年 5月20日受理)

Comprehension of Metaphor in Hearing-impaired Children.

Yutaka YOSHIOKA and Jun TANEMURA

*Kawasaki University of Medical Welfare
Faculty of Medical Professions
Department of Sensory Science
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Accepted May 20, 1998)*

Key words : hearing-impaired children, comprehension, metaphor, idiom,
receptive vocabulary age

Abstract

This study was designed to investigate the comprehension of metaphor in hearing-impaired children. Subjects were 32 junior and high school students in the school for the deaf. The stimuli were 3 kinds of metaphor sentences, namely, idioms, perceptual metaphors and conceptual metaphor sentences. Comprehension was measured by multiple-choice tasks. Receptive vocabulary age was measured by Picture Vocabulary Test (PVT) using kana characters.

The major findings were as follows:

- 1) The correct response rate was the highest for idiom sentences, followed by perceptual metaphors and conceptual metaphors, which was significantly low.
- 2) There were no significant differences with regard to school year and hearing level.
- 3) There were significant differences between the children who had receptive vocabulary ages over 12 years old and those with receptive vocabulary ages under 12 years old. An 80% correct response rate was considered to be a good comprehension of metaphor.
- 4) Literal interpretation decreased in high school students.

From these results, the mechanism of metaphor comprehension in hearing-impaired children is discussed.

要 約

本研究では、聴覚障害児における比喩文の理解力について検討した。対象は聾学校中学部および高等部に在籍する32名であった。課題文はイディオム文、知覚的比喩文、概念的比喩文各10文ずつ合計30であった。理解の測定方法は、課題文の文意に合致する文を複数の選択肢から選ぶ多肢選択法で行った。また、理解語彙年齢を絵画語い発達検査によって測定した。その結果、以下の知見を得た。

- 1) イディオム文の正答率が最も高く、次いで知覚的比喩文、概念的比喩文の順で、概念的比喩文の正答率が有意に低かった。
- 2) 学年別および聴力別に検討したところ、各比喩文の正答率に有意な差は認められなかった。
- 3) 各比喩文80%以上正答した場合をその比喩文が獲得できたと評価して分析を行ったところ、理解語彙年齢が12歳未満と12歳以上では有意な差が認められた。
- 4) 誤反応分析を行ったところ、高等部の者では字義通りの解釈をする誤りが著しく減少する傾向があった。

以上の結果をもとに聴覚障害児の比喩文理解について考察を加えた。

はじめに

我々は文を聞いてその意味内容を理解することができる。それが文字通りの意味ではなく、喩えであったとしてもそのいわんとするところを把握することができる。それを可能とならしめているのは、語彙の意味や統語などの言語に関する知識であり、より広範囲の一般的知識であろう。比喩文は通常の言語規則から見れば違反をしているのであるが、ある一定の条件の下で使用されるとより豊かな言語表現が可能となり、日常言語における特徴的な伝達手段となる¹⁾。

比喩文の理解は幼児には困難であり、Subject-Verb-Object ないしは Subject-Object-Verb の構造を持つ能動文や受動文の理解が6歳までにはほぼ可能となるのに対し、比喩文の理解は10歳になっても理解が向上しつづけ、文一文法の理解よりも獲得が遅れることが明らかになっている²⁻⁴⁾。さらに、比喩文といってもその種類は豊富であり、「人間はオオカミだ。」のような隠喩、「人間はオオカミのようだ。」のような直喩、「砂漠は生きている。」のような活喩などがあり⁵⁾、その内容も視覚的印象などに基づいた知覚的な比喩や概念に基づいた概念的な比喩がある。さ

らに、「目を白黒させる。」といったようなイディオムも比喩文の一種と考えられている¹⁾。

聴覚障害児を対象とした比喩文の理解については、いくつか報告がなされている。澤ら⁶⁾は、知覚的比喩文と概念的比喩文を課題文として多肢選択法により理解力を検討した。その結果、聴覚障害児の比喩文理解力は健常児よりも遅れること、年少児は字義的な解釈をする傾向があることなどが明らかとなった。また、澤ら⁷⁾は聴覚障害児が比喩文の理解に困難を示す要因として、語連想によって示される言語知識の枠組みの未熟さを指摘している。

聴覚障害児が比喩文の理解に困難を示す理由としては、他に聴覚障害による経験の制限が言語知識のみならず一般的知識の獲得をも困難にしていることが挙げられる⁸⁾。事実、澤ら⁶⁾の研究では、概念的比喩文が知覚的比喩文に比べて理解が困難であることが示されているが、概念的比喩文は言語の知識以上にその背景に一般的知識が必要と思われ、理解が困難となることは十分に予想される。これに対し比喩としては意識されないような死喩⁹⁾に近いと思われるイディオムは定型的な表現形式であり、概念的比喩文よりは容易であることが予想される。そ

表1 対象

| | |
|----------|--------------------------------------------|
| 例数 | 32名 |
| 内 訳 | 中等部1年 6名, 2年 2名, 3年 8名 高等部1年 4名, 3年 12名 |
| 年齢範囲 | 12歳7ヵ月～18歳11ヵ月 |
| 良聴耳の聴力範囲 | 70～134dBHL 以上 (平均99dBHL) |

表2 比喩文の種類

| | |
|--------|---------------|
| 知覚的比喩文 | 小鳥はバイオリンです |
| 概念的比喩文 | コックさんはまほう使いです |
| イディオム文 | 私は弟に手を焼きました |

ここで本研究では、澤ら⁶⁾が用いた2種類の比喩文に加えイディオム文を課題文として、聴覚障害児におけるイディオム文の理解力を知覚的比喩文及び概念的比喩文と比較し、誤りの傾向からその理解方式の特徴について分析を行った。さらに、聴力の程度や理解語彙力との関連についても検討した。

方 法

1. 対 象

対象は表1に示した通り、某県内の聾学校に在籍する中等部および高等部生徒32名であった。その内訳は中等部1年が6名、2年が2名、3年が8名、高等部1年が4名、3年が12名であった。年齢範囲は12歳7ヵ月～18歳11ヵ月であった。聴力障害の程度は全員重度であり、良聴耳の平均聴力は99dBHLであった。

なお、被験児は聴覚障害以外に問題は有さないものを分析の対象とした。

2. 課 題 文

課題文は知覚的比喩文、概念的比喩文およびイディオム文の3種類であった。知覚的比喩文と概念的比喩文は澤ら⁶⁾と同一のものをを用い、比喩の形態は「～です。」で終わる隠喩とした。

知覚的比喩文は喩えの対象となる趣意(被喩辞)と対象を喩える表現手段となる媒体(喩辞)

表3 知覚的および概念的比喩文における選択肢

| | |
|-------|----------------|
| 例 文 | つばめは飛行機です |
| 正 答 | つばめは、とても早く飛びます |
| 魔術的表現 | つばめは、飛行機になります |
| 趣意表現 | つばめは、黒い色をしています |
| 媒体表現 | つばめは、とても大きいです |

表4 イディオム文における選択肢

| | |
|------|--------------|
| 例 文 | 彼は仕事で手を抜きました |
| 正 答 | いいかげんにしました |
| 字義解釈 | 仕事で手が抜けました |
| その他 | 自分の手を引っ込めました |

との関係が知覚的的属性に基づいている比喩文のことである。具体的には表2に示す「小鳥はバイオリンです。」のような文である。

概念的比喩文は趣意と媒体との関係が概念的属性に基づく比喩文のことである。表2の「コックさんは魔法使いです。」を用いて説明すると、コックさんも魔法使いもとても信じられないようなものを作り出すといった概念的な属性で比喩が成立している。

一方、イディオム文は定型的な表現方法であり、表2に示すような「私は弟に手を焼きました。」がその一例である。

これらの課題文のうち知覚的比喩文と概念的比喩文においては、選択肢を表3に示すような正答を含む4種類とした。魔術的表現とは字義的な解釈であり、趣意表現とは喩えられる被喩辞に関する表現を述べているもの(ここでは燕に関する黒い色という記述)であり、媒体表現とは喩えている喩辞に関する表現がなされているもの(ここでは飛行機に関する大きいという記述)である。イディオム文における選択肢は表4に示した。正答となる「いいかげんにしました」、字義通りに解釈した「仕事で手が抜けました」、その他拡大解釈などの誤り「自分の手を引っ込めました」の3種類であった。

注1:例えば、「命からがら逃げ出した」という文の「からがら」は本来「辛々」と表記され比喩表現であったが、今となっては「辛さ」を連想する人はいないであろう。

以上、3種類の課題文各10文ずつを知覚的比喩文と概念的比喩文は交互になるように配列し、イディオム文では別の1群とした。課題文は文字を通して提示され、冊子にまとめて被験児に配布され、集団法により実施した。なお、文字は漢字仮名交じり文としたが、漢字には読み仮名をつけた。

3. 理解語彙検査

理解語彙能力を測定する検査として絵画語い発達検査⁹⁾を用いた。本検査は聴覚的な理解語彙年齢を算出できるものであるが、聴覚障害を考慮して仮名文字を提示することによって算出した。本検査も選択絵に文字を提示した冊子を作成し集団法で測定した。

なお、絵画語い発達検査の適用年齢は10歳までで適用年齢を超えているが、参考として理解語彙能力を知るために行い、理解語彙年齢を算出した。

結 果

1. 各課題文の正答率

各種類の比喩文の正答率を図1に示した。イ

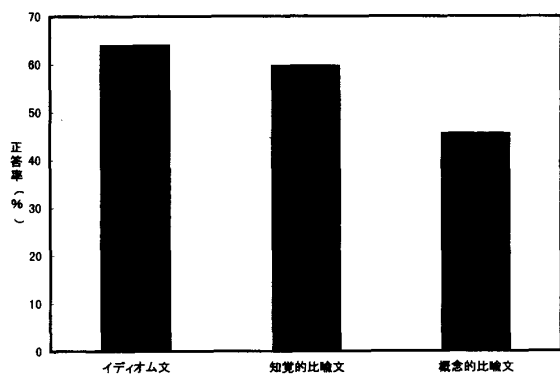


図1 比喩文別の正答率

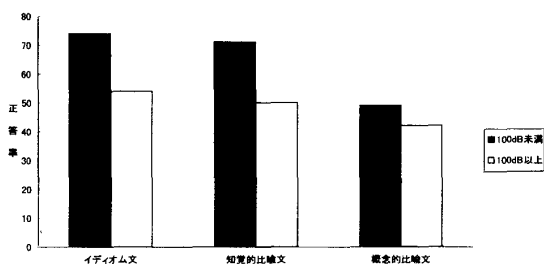


図2 聴力別の正答率

ディオム文は63.8%、知覚的比喩文59.7%、概念的比喩文45.6%であった。各文間で統計的有意差を検討したところ、イディオム文と概念的比喩文の間、知覚的比喩文と概念的比喩文との間で1%水準で有意差が認められた(イディオム文と概念的比喩文の間: $t = 3.79, df = 31, P < .01$, 知覚的比喩文と概念的比喩文の間: $t = 3.29, df = 31, P < .01$)。

2. 聴力別にみた比喩文の理解力

平均聴力レベルを100dB未満と100dB以上の2群において各比喩文の正答率の差を検討したのが図2である。この図からは100dB未満の者の方が正答率が高いようにみえるが、検定を行ったところ知覚的比喩文でのみ有意差傾向が認められたのみで、その他の比喩文では有意差は認められなかった(イディオム文: $t = 1.54, df = 30, P > .1$, 知覚的比喩文: $t = 2.03, df = 30, .05 < P < .1$, 概念的比喩文: $t = 0.78, df = 30, P > .1$)。

3. 各比喩文を理解できた人数について

各比喩文を80%以上正答した場合を比喩の獲得ができていないものと判断して、分析を行った。図3は理解できた人数を学年別に検討したものである。中等部および高等部といった学年による分析では、各比喩文を理解できた人数に差は認められず、有意な結果は得られなかった(イディオム文: $\chi^2 = .51, df = 1, P > .1$, 知覚的比喩文: $\chi^2 = .13, df = 1, P > .1$, 概念的比喩文: $\chi^2 = .24, df = 1, P > .1$)。

そこで、理解語彙年齢による分析を行った。理解語彙年齢を12歳以上と12歳未満の2群に分け、各比喩文を理解できた者の人数を算出した。その結果を図4に示した。この図から、理解語彙年齢12歳未満の者で比喩文を理解できている

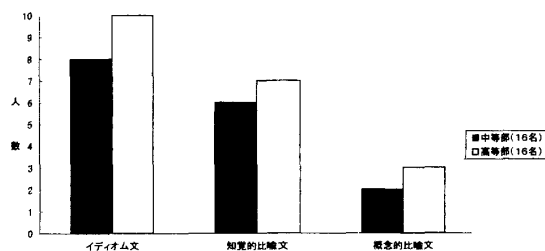


図3 学年別に見た比喩文の理解人数

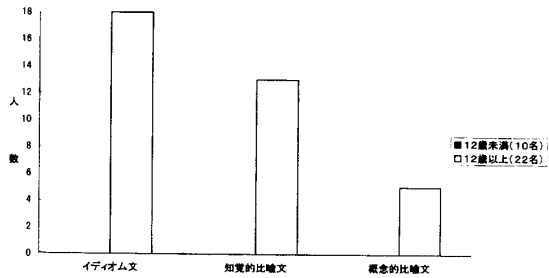


図4 理解語彙年齢別に見た比喩文の理解人数

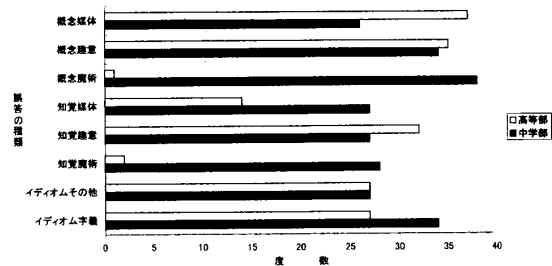


図5 学年別に見た誤答傾向

と判断される者は一人もいないことがわかる。一方、理解語彙年齢12歳以上の者では、イディオム文で18名、知覚的比喩文で13名、概念的比喩文で5名であり、イディオム、知覚的比喩文、概念的比喩文の順であった。なお、各比喩文について統計的検討を行ったところ、概念的比喩文をのぞくイディオム文と知覚的比喩文で有意差が認められた(イディオム文： $\chi^2 = 18.7$, $df = 1$, $P < .001$, 知覚的比喩文： $\chi^2 = 10.0$, $df = 1$, $P < .005$, 概念的比喩文： $\chi^2 = 2.7$, $df = 1$, $P > .1$)。

4. 誤反応傾向について

各比喩文ごとに誤反応の傾向について、学年別に検討したのが図5である。イディオム文では誤反応に一定の傾向は認められない。しかし、知覚的比喩文と概念的比喩文においては、高等部になると魔術的解釈の割合が著しく減少していることがわかる。

考 察

1. 各種比喩文の理解力について

本研究の結果、聴覚障害児においては概念的比喩文の理解が知覚的比喩文とイディオム文と比較して有意に低かった。これは澤ら⁹⁾と一致している。さらに、5～6歳の幼児でも知覚的な属性に基づく比喩の理解は可能であるが、抽象的な関係を示す比喩については9～10歳になるまで困難であることを明らかにした Gentner¹⁰⁾の結果とも一致している。以上のことから、本研究で対象となった聴覚障害児は個人差はあるものの、健常児の9～10歳レベルの比喩文理解力に到達することが困難であるといえる。これは従来指摘されている「9歳の壁」と関連する

ものであろう。

では何故、知覚的比喩文およびイディオム文は概念的比喩文よりよく理解されるのであろうか。一般に比喩においては喩えられるものと喩えるものとの間に意味的類似性は少なく、ある一側面の共通点を強調している。例えば「男は狼だ。」という比喩において、男と狼は生きものであるが通常は「人間」と「動物」という異なるカテゴリーとして認識される。しかし、この比喩においては「獐猛さ」という点で比喩が成立している。このように比喩を理解するには、通常とは異なった意味理解が必要とされる。概念的比喩文はまさにこのような理解過程を経ているものと思われる。しかも、概念的比喩文では喩えとなる喩辞と喩えられる被喩辞の意味処理を行なうことが必要である。一方、知覚的比喩文は喩辞と被喩辞の共通点が視覚的あるいは聴覚的な感覚属性に基づいており、概念的比喩文と比べ共通点を発見しやすいものと思われる。さらに、今回用いた知覚的比喩文は視覚的なものが多く、聴覚的な知覚的比喩文は少なかった。聴覚障害児は視覚的な知覚比喩文は理解可能であるが、聴覚的な知覚比喩文は理解が困難であることが予想される。今後、検討することが必要であろう。

また、イディオム文はその表現から意味を推測することは困難で、イディオムが意味するところを習得することが必要であり、イディオムに接したことがあるかどうかの問題となる。よって、イディオムの種類によっては理解が困難となる可能性がある。当然のことながら、今回の研究ですべてのイディオムを網羅しているわけではなく、今回使用したイディオムが使用頻度

の高いものであったことが理解良好の一因であったと考えられる。また、イディオム文においては選択肢が他の比喩文よりも1つ少なかったことも影響しているかもしれない。今後さらに、多くの種類のイディオム文を用いて検討する必要があると思われる。

2. 比喩文の理解に影響する要因について

本研究の結果、聴力の程度は比喩文の理解とはあまり関係がなかった。この結果は、Rittenhouseら¹¹⁾の結果と一致する。本研究では100dBを境に比喩文の理解人数を検討したが、澤ら⁹⁾は90dBを境として分析している。本研究でも、90dBを境として分析を行ってみたが、結果は同様であった。一般に聾学校に在籍する聴覚障害児の難聴の程度は重度であり、差がでにくいかもしれない。もっと幅広い聴力障害の程度のもを対象としたのであれば、比喩文の理解力に差が生じたかもしれない。

次いで、理解語彙年齢による理解の程度について検討した結果、理解語彙年齢が12歳を境として差があることが明らかとなった。この結果は澤ら⁹⁾とは異なっている。澤ら⁹⁾の研究で分析の対象とした語彙力は読書力検査の一部であり、本研究では絵画語い発達検査という標準化された検査であった。以上の点は検査の精度の点で差が生じることが推測される。一般に比喩文の理解は語彙の文字通りの意味を理解するだけでは不十分である。文字通りの意味を理解した上で、喩辞と被喩辞との関係を解釈しなければならない。従って、比喩文を理解する上で十分な語彙力が必要とされることが予測される。よって、本研究の結果は妥当なものと考えられ、比喩文を理解するためには語彙力が前提であり、それを習得させる必要があると思われる。

3. 誤答傾向について

本研究の結果、知覚的比喩文と概念的比喩文

において中学部と高等部では誤答傾向が異なっていた。すなわち、中学部では相対的に魔術的(字義的)な誤りが多かったが、高等部では字義的な誤りが著しく減少していた。この傾向は澤ら⁹⁾と一致している。この事実、高等部においては比喩文の正しい理解には到達することができなくとも、文字通りに意味解釈することはおかしいと感じているのではないかと思われる。そして、趣意表現や媒体表現の意味解釈をするのではないかと考えられる。この意味で同じ誤りであっても字義的な解釈とそれ以外とは質的な違いがあるといえる。これは、生活年齢が高い者の方が経験が豊富であり、一般的知識が多いことが関与しているかもしれない。さらに澤ら⁹⁾は、趣意表現を選択するものは相対的に低学年のものに多いことを報告しているが、本研究では研究の対象となった被験児の年齢範囲が異なることもあり、その傾向は明らかではなかった。

一方、イディオム文では字義的誤りが高等部で減少する傾向は認められなかった。これは、イディオム文においては語彙から意味を類推することが困難であり、イディオム表現自体に接しその意味を1つの表現として習得することが求められるものと思われる。よって、最も解釈しやすい字義的な解釈をイディオム文において行ったものと思われる。この点においては学習指導によってイディオムを習得できる可能性があるものと思われる。

稿を終えるにあたり、資料収集に御協力賜った施設の先生方および生徒の皆様に深謝いたします。また、研究の課題の作成に協力してくれた川崎医療福祉大学卒業生岡田依里さんに感謝します。また、研究の資料である課題文をお教え下さった東京学芸大学講師 澤 隆史 先生に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) 山梨正明 (1988) 比喩と理解. 東京大学出版会, pp 1-4.
- 2) Dent C and Rosenberg L (1990) Visual and verbal metaphors: developmental interactions. *Child Development*, 61(4), 983-994.
- 3) Nippold MA and Sullivian MP (1987) Verbal and perceptual analogical reasoning and proportional

- metaphor comprehension in young children. *Journal of Speech and Hearing Research*, **30**(3), 367–376.
- 4) Hayashibe H (1975) Word order and particles: a developmental study in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics*, **8**, 1–18.
 - 5) 芳賀 純, 子安増生 (1990) メタファーの心理学. 誠信書房, pp 1–14.
 - 6) 澤 隆史, 吉野公喜 (1994) 聴覚障害児の比喩文理解に関する実験的検討. *特殊教育学研究*, **31**(4), 19–26.
 - 7) 澤 隆史, 吉野公喜 (1995) 聴覚障害児の比喩文理解と言語的枠組みの形成. *特殊教育学研究*, **33**(2), 21–29.
 - 8) 草薙進郎, 四日市章編著 (1996) 聴覚障害児の教育と方法. コレール社.
 - 9) 上野一彦, 撫尾知信, 飯長喜一郎 (1980) 絵画語い発達検査 (PVT) 修正版手引. 日本文化科学社.
 - 10) Gentner D (1988) Metaphor as structure mapping: the relational shift. *Child Development*, **59**, 47–59.
 - 11) Rittenhouse RK and Kenyon PL (1991) Conservation and metaphor acquisition in hearing-impaired children. *American Annual of the Deaf*, **136**(4), 313–320.